

本多勝一著「本多勝一の日本人論—ロシア、アメリカとの関係を問う—」新日本出版社、2012 年 3 月 20 日刊
を読む

ルポルタージュとは何か

1. reportage というフランス語は、辞書では「ルポルタージュ・探訪記事・現地報告、ルポルタージュ文学」(大修館書店『新スタンダード仏和辞典』)などと訳されています。『週間金曜日』のルポルタージュ大賞のひとつとして「報告文学賞」があるのは「ルポルタージュ」の訳語としての意味もあるわけです。
2. これが重要視されるようになったのは第一次世界大戦のころからですが、どちらかといえばジャーナリズムよりも文学運動の側から出てきた形式であって、それが近年になるにつれてジャーナリズムの方へと主流が移ってきた次第です。
3. 他方「ノンフィクション」という言葉もあり、これもどちらかというと「文学の一部門」(小学館『ランダムハウス英和大辞典』)とされているようですが、ルポとの決定的な違いは、フィクションの傘の下にあるせいか、事実に対する態度がいいかげんな点です。ニュージャーナリズムなんて言われているジャンルにも似たところがあって、これらは「読みもの」としての娯楽性に重点があり、それが悪いというのでは決してないけれど、少なくとも私は自分のルポをこの意味でのノンフィクションとは考えていません。
4. documentary というイギリス語もありますが、これは映画やテレビでのドキュメンタリー(実録・記録もの)に使われることが多く、活字メディアでのルポにほぼ相当するとみてよいでしょう。しかしルポほど事実第一主義ではないような印象を受けます。
5. ルポとしての一般的条件といえば、やはり取材活動によって得た多くの事実や証言・証拠をもとに、一切のフィクションを排して書かれた報告・記録の類^{たぐい}ということになりましょうか。「調査報道」という言葉もありますが、これは調査した結果に重点がありますから、もし調査経過も含めて書いてゆけばルポになることもあるでしょう。
6. 私自身の事例をあげてみますと、最近出た『南京大虐殺』(朝日新聞社・以下同)や『極限の民族』『北爆の下』などは典型的ルポですが、『アイヌ民族』の主要部分はノンフィクションの手法を使いました。なにしろ 500 年前の生活の再現でしたから。

P139 ~ 141

7. (1)企画・予備調査
- (2)取材

(3)構成

(4)執筆・発表

「老年」とは、『類語大辞典』（講談社）によれば「年をとって心身ともに衰えること」とあり、やはり「心身」の衰えが長編ルポにはほとんど致命的です。「心」もさることながら「身」は直接ひびきます。

私自身の体験からしても、いわゆる「湾岸戦争」という名の第一次イラク戦争の戦跡を 2002 年の春 70 歳で取材したあと（ルポ『非常事態のイラクに行く』朝日新聞社・同年 12 月）、体調がおかしくなって下痢が長らくつづき、この秋に予定していた北朝鮮の取材を中止せざるをえませんでした。すでに入国査証や航空切符もとってあったのですが、出国直前になっても完治しなかったからです。下痢の原因はよく分からず、結局は戦跡で戦車などの残骸を放射能調査してまわったからではないかという推論でした。自衛隊によれば、精密検査にはドイツに行くしかないとかで諦めていたのです。

海外取材で自然も人文も環境が全く異なる地域へ行くと、当初しばらくは体調をくずすことなどむしろ普通ですし、私も学生時代に初めての外国として行ったパキスタンでは、下痢がはじめての 2 週間ほどつづいたものです。しかも喜寿ともなるとそれだけでは治まらぬということですね。

8. 長編ルポの取材は、気ままな旅行記を書く場合とは全く次元が違います。たとえば最初の海外ルポ『カナダ＝エスキモー』にしても、どこのエスキモー（インユイ民族）が最も伝統的未開社会を保っているかの事前調査や文献調べに時間と精力を使ったものの、そんなことはルポに書きはしません。さらに現地では緻密な「作戦」と苛酷な動きを要しますが、これも詳細を発表するわけではありません。まして『戦場の村』（ベトナム戦争）ともなると、米軍の最前線従軍やこれと対決する解放戦線潜入のような、多くのベトナム特派記者がそれまでやったことのなかった取材を敢行したわけです。

9. しかし、これらは 30 歳台の若いころでさえカラダを張っての苛酷な仕事でした。真に説得力のあるルポは、苛酷な現場取材と表裏の関係にあります。それを 80 歳近い「後期高齢者」の体力に求めるのでしょうか。私と同世代の年齢で現場からの長編ルポを書いているライターなど一人もない事実をお考え下さい。ということは、若い世代のすぐれた長編ルポを期待することでもあります。

P150 ～ 151

[コメント]

私の尊敬する反骨のジャーナリスト本多勝一氏のジャーナリズムへの期待は、ルポルタージュ、調査報道の充実だ。「カナダ＝エスキモー」と「戦場の村」は日本のジャーナリズムのレベルの高さを示すもので、ルポルタージュ、調査報道の代表作、古典と言われるものだ。

— 2014 年 1 月 25 日 林 明夫記 —